

「予防できる唯一のがん」としてワクチン接種の法定化が予定される子宮頸がん。3年前より全国に先駆けて無料接種を始め問題事例はないとされていた杉並区で、重い副反応に苦しむ女子中学生がいた。一昨年の小松久子の質問に続き、生活者ネット区議の曾根文子が議会でこの事実を質し、区は独自の救済策を発表した。だが死亡例もあるワクチン接種は、副反応以外にも問題が多い。

東京・生活者ネットワーク政策委員
／杉並区議会議員 ●小松 久子



東京・生活者ネットワーク政策委員、杉並・生活者ネットワーク区議会議員の小松久子(手前)と、同区議の曾根文子(杉並区議会ネットみどり控室で)

生活と政治をつなぐ情報紙

生活者通信

東京・生活者ネットワーク

No.259

2013.4.1

※毎月1回1日発行
※1994年5月23日第三種郵便物認可

■発行 東京・生活者ネットワーク
■〒160-0021
東京都新宿区歌舞伎町2-19-13 ASKビル5階
TEL03-3200-9189 FAX03-3200-9274
■Eメール tokyo@seikatsusha.net
■ホームページ http://www.seikatsusha.net
■発行責任者 西崎光子
■定価 年間1000円・1部100円
■郵便振替口座 00130-3-18417

都 「東京都帰宅困難者対策条例」施行、
「新たな多摩のビジョン」発表。

ネット ●東京 リヒテルズ直子さん
講演会「安心・共生・幸せ オランダ型成熟・市民社会に学ぶ」 4月12日(金) 14:00～
都庁議会棟6階第一会議室
●大田 藤原瑠美さん講演会「高齢化社会の
迎え方～スウェーデンの例から」 4月13日
(土)13:30～ 大田区立消費者生活センター
大集会室
●世田谷 リヒテルズ直子さん講演会「どう
する?東京の教育～オランダから学ぶ」 4月
20日(土) 10:00～ 成城ホール4階集会室
●大田・品川・目黒 リヒテルズ直子さん講演
会「一人ひとりの人間を大切に国・オランダ
の教育から学ぶ」 4月20日(土) 15:00～
大田区立消費者生活センター大集会室
●練馬 政策発表会・みんなで語ろう!「豊
かさとは何か」 4月21日(日) 14:00～
石神井庁舎会議室2・3 講師:輝峻淑子さん
(埼玉大学名誉教授)
●大田 活動報告集会「主権者 都民」 4月
29日(月・祝) 18:30～ 大田区民ホール・ア
プリコ小ホール

子宮頸がんワクチンで重い副反応

予防接種を受けた杉並区の少女に重い症状―問題多い定期接種化
「問題なし」?!

発端は2月初旬、杉並・生活者ネットワーク事務所にかかってきた1本の電話だった。

区内に住む女性は、自分の娘が子宮頸がんワクチン「サーバリックス」接種による副反応に苦しんでいると訴え、昨年6月議会の曾根区議の一般質問への答弁が「事実と違う」というのだ。「副作用の報告はあったのか」という質問に対する区の答弁は「重篤な事例報告は受けていない」というもの。ところが、2011年11月当時、中1だった娘さんは2回目の接種直後から腕のしびれに襲われ、全身の痛みにひろがった。歩行困難で車イス使用となり、一時期は自分の名前すら言えない重い状態で、1年3カ月も学校に行けなくなってしまった。

このワクチン接種については、実は曾根質問の以前に、私小松久子が議会で副作用に関する

る質問をしている。杉並区が国の助成開始前に自前で「中学入学祝いワクチン」として無料接種を導入した後、11年12月議会に、国の方針を受けて対象者を広げるための補正予算が諮られたときのことだ。総務財政委員会で「事故を含め問題などは起きていないか」と質したのに対し「一部腕のはれとか痛み等の事例は報告を受けているが大きな問題ではない」と区は答えている。だがこのときすでに娘さんは接種後の副反応で通学できない症状にあった。

3月7日の区議会予算委員会で曾根がこの問題を明らかにした翌8日、各新聞の取材が殺到した区は、任意接種への対応としては異例の、救済制度の設置を表明。13日には、一昨年、昨年の答弁は虚偽であったと認めた。

法定化より 性教育の充実が先だ

事実を隠した議会答弁は論外だが、最も問題とすべきは安全

性だ。一般的にどんな予防接種も副反応は不可避とされるが、サーバリックスは他と比べて発生率が高く、インフルエンザの約10倍。すでに全国で956件の事例が報告されているばかりか死亡例もある。

しかもこの薬剤は臨床試験の終了を待たずに国が導入を決めた経緯があり、治験が不十分であった疑義が拭えない。がん予防効果についても、「期待されるものの実際に達成されたという証拠は未だなく」と厚生省関係機関が報告書で述べている。つまり安全性、予防効果のいずれも確証がないままに、政治的に導入された薬剤ということだ。法定化すれば莫大な公費が投入され、自治体は接種を勧奨する義務を負う。ターゲットは十代の少女たちだ。正しい情報提供が不可欠であり、子宮頸がんが性感染症であればなおさら、性教育の充実こそ最優先されるべきだ。

あんでな

チェチェン連絡会議の活動 村山敦子

「チェチェン連絡会議」は、ロシアで起きているチェチェン紛争(1994～96年が第一次戦争、1999年～現在が第二次戦争と呼ばれている)の平和的解決のために活動するNGOと個人の集まりで、この問題への関心を日本の社会で喚起するために1999年から活動をしてきました。

戦争がもたらした人権の侵害や、この地域の伝統文化の破壊を少しでもくい止め、日本国内でのコーカサス全域への関心を高め、各国の支援組織との連携を深め、国際世論としての戦争反対、非暴力の徹底、人権と民主主義の確立、侵略者の撤退を強く要求していきたいと考えています。これまで紛争のさなかから来日したチェチェン人活動家や医

師、ロシア人ジャーナリスト、ロシア兵士の母委員会創設者なども招いて講演会活動を行ったり、アンナ・ポリトコフスカヤなどの映画上映会を行ったりしてきました。今後は、文化的なものや、医療支援活動も含めて、地味でも継続的な活動を行っていきます。

今年の活動の目玉は、チェチェン人女性映像作家、ザラ・イマーエフさんを招いての全国スピーキングツアーです。人口の4分の1にあたる約25万人の命が失われ、数十万人が難民として世界各地へと散ったチェチェン。一方で、震災と原発事故により30万人以上が避難生活を続け、近隣諸国とのきしみも増すばかりの日本。遠く離れた二つの国の接点を探りながらく再生への希望を語り合ひましょう。4月中旬まで全国を巡回中。詳細はウェブサイトです。

【チェチェン連絡会議会員／ロシア語翻訳・通訳】



▲「旅人は見た―チェチェン戦争の歴史と普通のひとびとの暮らし」写真展の最終日。バンド演奏とチェチェン・グルジア料理で交流する参加者たち。2011年5月1日。ウェブサイト <http://chechen.jpn.org/>